

# 中庸の仏教的解釈

## はじめに

中庸は中国の儒家の書として現在も伝えられています。一見して、この中庸の書の原点は仏教の菩薩道について説かれた経文で、それを儒家が儒教の教えにあうように書き改めたものであると観じました。古来からの教えを編纂して儒家の書としたため、作者も未だに同定されていないように思います。

また中国の古典書は古来の教えを編者の意図に合わせて抜粋、編集していますので、文字通りの解釈では、意味も通じにくくなっています。そしてまた、作者も不明なものも多く、その解釈も研究者や学者によつてさまざまで、それぞれが自分の解釈が正しいと主張しています。まるで荘子の語っていた儒家と墨家の争いのようにも見受けられます。

この中庸という言葉そのものが仏教用語で、荘子の教えである莊周菩薩品に語られている道枢のことであると思います。7世紀の人、玄奘三蔵も大唐西域記の中で、徳は中庸に契うと仏教用語として用いています。

仏教的には中庸の「中」は中心の中であり、すなわち中空の中ですから、何も無いと言う意味の「中」であり、まさに荘子の言う枢のことです。莊周菩薩品の偈文である老子書には、第五章に虚用という題で書かれています。

般若心経では空中無色 無受想行識、すなわち、空の中には色（目に見える物質的な存在）も無く、五

感（色声香味触）の感受作用も想念も無く、意志による行動も無く、認識作用も無い、と説かれています（統・莊周菩薩品「莊子の般若心経」を参照）。

ですから中庸の中は莊子のいうところの一、すなわち是非の分別を越えた無分別智のことであり、自然の摂理に順い、徳の積集によつて陰と陽の気を調和した虚静恬淡の境地のことです。

庸は用のことです。無用の用のことであり、仏教的には無功用の妙用の「用」だと思えます。無功用は、執着からくる人為的な判断をすること無く、在るがままに自然の摂理に任せることであり、妙用は太陽や月や海の如く、何の見返りを求めること無く、万物斉同に施す慈悲心のことです（莊周菩薩品「無功用の妙用」を参照）。

中庸とは空用、すなわち妙用のことです。中庸の道とは大自然のように、自我を滅尽し、是非や有無の分別を越えた所にある空つぽの道のことです。まさに仏教の「空」の道のことでした。如来の五智の教えを学び、そして戒律を守り、精進修行しながら歩む菩薩道のことです（莊周菩薩品「金剛杵と五智」を参照）。

この中庸も他の古典書の如く、その時代の治政者や、また編者の意図により改ざんされているように思いました。できるだけ莊子の教えに随い、私的ではありませんが、観ずるままに仏教的な解釈を試みていきたいと思えます。読み下し文は、儒学者である朱子の編纂したものを元に書かれている新釈漢文大系を参考にさせて戴きました。

## 第一段、第一節

中庸の冒頭の一節です。

「天の命ずる、これを性しやうという。性しやうに率したがう、これを道みちという。道を修める、これを教きやうという。道は、須臾しゆゆも離れるべからず。離れたるは道みちに非あらず。この故に君子は其の視えざるところに戒慎かいかんし、其の聞こえざる所に恐懼きやうくす。隠いんにして見ることな莫なく、微びにして顕あらわれること莫なし。故に君子は其の獨どくを慎つしむなり」

性命とは内なる天分の本性のことで、誰もが内に持つ清浄心のことです。この内なる鏡が過去の世、前世の業ごう、カルマにより覆われて輝きを失ってしまったのがこの世界に輪廻して来ている私たちです。ここでは過去世の因縁により天から貸し与えられた肢体や能力、住む場所や環境までも包含して語っています。ここ率は循りや順の意味で、したがうこと、須臾はほんの少しの間のことです。君子は莊子の言う至人しじんに己おのれ無く、神人に功こう無く、聖人に名な莫なし、の至人であり、神人であり、聖人のことです（莊周菩薩品「私はいったい誰のもの」を参照）。儒家のいう聖人のことではありません。戒慎の戒は、五戒、十善行のことです。すなわち五戒の不殺生、不偷盜、不邪淫、不妄語、不飲酒に、十善行の不悪口、不兩舌、不綺語、不貪欲、不瞋恚、不邪見を加えたものです。

（莊周菩薩品「帝釈天と十善を参照）。戒慎の慎は戒律を護持し、身を慎むことです。

私訳してみますと、

誰もが内に持つ天分の本性、すなわち真如の月を映しだす鏡のような清浄心しやうじやうしんですが、前世、過去世のカルマにより曇ってしまい、その輝きを失ってしまいました。その曇りを取り払い、魂を浄化し、内なる清浄心を輝かせるための精進修行に、私たちはこの地球に転生して来ました。そして天は、それぞれの因縁所生により身体を貸し与え、家族を与え、住む場所を与えてくれました。それを在るがままに受け入れ、少欲知足にして虚静恬淡に生きることが道を歩む、それが菩薩道を歩むことです。その道を正しく歩むために修習するのが仏教、すなわち如来の教えです。常に如来の教えを護持し、虚静恬淡に道を歩むことが菩薩道であり、如来の教えを離れば、それはもう菩薩道ではありません。

これ故に君子、いわゆる聖人といわれる菩薩道を歩む人は、目に見える五色に飾られた物などに惑わされること無く、戒律により自らを戒め慎み、耳で聞こえる人為的な五音などにも惑わされること無く（莊周菩薩品「駢母枝指と儒教」を参照）、大自然の教えに耳を傾け（莊周菩薩品「莊子、天籟を語る」を参照）、如来の教えである宇宙の真理を畏れ敬い、まさに自然の摂理せつりに順したがって生きているのです。その道は、無垢清浄なる心で無ければ観みすることができないものであり、また、その教えは言葉で語ることも出来ない微妙みひょうなものです（補・莊周菩薩品「莊子、親近しんじん処しよを語る」を参照）。それは精進修行をして身を慎み、陰徳いんとくを積集じやくじゆして初めて歩める道、すなわち菩薩道のことなのです。ですから聖人といわれる人は精進を怠ることなく、獨、すなわち一なる無分別の境地に身を処おれているのです、と述べています。

この中庸の冒頭には、中国曹洞宗の仏教徒でもあり、ヒッタイトの高次元の教えを修習した莊子こと、莊周菩薩の教えが語られています。いつしか儒家の教えのように改ざんされ、解釈されています。しかし、

その教えをいかに隠したにしても、どこかに隠せない真実が残るものです。莊子は莊子書は心齋しんさいして読むべし、と語りました。心齋すれば必ず書かれています深い内容を読み取ることが出来ると教えてくれました（莊周菩薩品「莊子、心齋を説く」を参照）。私自身も精進食を取り、身の潔齋に勤めながら、これからの中庸の書の解釈を進めていきたいと思えます。

## 第一段、第二節

「喜怒哀樂きどあいらくの未だ発いせざる、これを中という。発して皆、節あに中る、これを和という。中なるは、天下の大本なり。和なるは天下の達道たつどうなり。中和に致りて天下に位くらし、万物ばんぶつを育はぐむ」  
私訳してみますと、

喜怒哀樂がまだ発現していない時、すなわち地球上に生命体が誕生する前を「中」といいます。混沌とした空の世界のことで、莊子のいう道枢、一のことです。この一から陰と陽の二つの気に分かれ、軽い陽の気は上に昇り天となり、重い陰の気は沈んで大地が形成されます。この陰と陽の気が太陽や月、そして地球などの陰徳、すなわち大自然の摂理により調和され、この大地に四時、すなわち春、夏、秋、冬という季節の変化が訪れ、四大しだいと呼ばれる風、火、水、地が集合し、この地球上の万物が生み出されるのです。これを陰と陽の気の大自然の徳による調和というのです。あらゆる物を生み出す中空なる枢、すなわち一が万物の根本なのです。

相対する物を調和するには陰徳を積むことが肝要です。この陰徳の積集こそが大自然の摂理であり、菩薩道なのです。太陽が見返りを求めること無く、万物平等に大慧の光を与えてくれるように、月が海の水の干満を司り、水が天地の大循環の中で、万物を滋養するために大慈の雨をもたらしてくれるように、それぞれが、それぞれの役割を虚静恬淡に果たしているのです。それが自然の摂理であり、この地球の大地に万物を生みだし、滋養しているのです、と語られています。

地球上の生命体を感情体としてとらえ、喜怒哀楽と表現していますが、この一節は莊子書の天道篇からの引用とされます。「中」は莊子の語る道枢のことで、空なるが故にあらゆる事に対応できるというのが莊子の教えでした。まさに仏教の空観であり、莊子の無分別の境地を語っています。

莊子は天道篇の一節で以下のように語っています。

「虚静恬淡、寂寞無為なる者は、天地の本にして、道の徳の至りなり。故に帝王、聖人、焉に休す。休すれば、則ち虚なり。虚なれば、則ち実なり。実なる者は倫あり。虚なれば、則ち静なり。静なれば、則ち動なり。動なれば、則ち得なり。静なれば、則ち無為なり。無為なれば、則ち事に任ずる者の責あり。無為なれば、則ち喩喩たり。喩喩たる者は憂患處すること能わず」

この莊子の一節を私訳してみますと、

虚静恬淡（心にわだかまりや先入観が無く、心が平穏なこと）にして、寂寞無為（人為の物から離れて自然の流れに順い、心静かに精進、修行すること）の境地は、この世界で、輪廻の目的である自己の魂を浄化するための根本の教えです。自然の摂理に順い、自我を滅し、見返りを求めない利他行をなすことが

陰徳を積集する事であり、これが菩薩道なのです。ですから聖人や帝王はここに心を休めて憩うのです。名利などへの執着も無く、自我も無く、心はからっぽ（空）なので何事にも惑わされることはありません。心が空っぽであれば分別する事も無く、在るがままを見る事ができるので、まさに真実が見えるのです。真実が見える者は倫、すなわち自然の摂理に順つています。ですから、空であれば心は静寂です。静寂であれば何事が起こっても対応することが出来ます。そして、物事に対応するときは、徳、すなわち自我を離れて行動します。また、静寂であれば無為、すなわち身を在るがままに自然に委ねていますから、物事に対応するときも自然の摂理に順い、臨機応変に対応することが出来ます。その行いは見返りを求めることも無く、名利を求めることも無いので、喩喩、すなわち快く物事に対処できるのです。そして、仕事が終われば跡を残さないように静かに去って行きますから、そのことで憂い患うこともありませんと語っています（続・莊周菩薩品「莊子、天の道を説く」を参照）。

## 第二段、第一節

「仲尼ちゆうじ曰く、君子は中庸す。小人は中庸しやうじんに反す。君子の中庸や、君子にして時中じちゆうにあり。小人の中庸や、小人にして忌憚きたんすること無きなり。子曰く、中庸は其れ至れるかな。民は能く久しくすること鮮すくなし」  
私訳してみますと、

仲尼、すなわち孔子が言いました。君子、すなわち聖人は中庸の道に身を委ねています。名利を求める

小人は、中庸の道から離れた生活をおくっています。聖人は中庸の道を歩み、時中、すなわち季節に変化があるように、在るがままに自然の流れに身を委ね、自然の摂理に順い、物事に対処しています。小人は忌憚なく、すなわち大自然の摂理である如来の教えを畏れ敬うこと無く、常に自己の利益を中心に物事を考えて生活をおくっています。さらに孔子は、中庸は至人の成す所、精進修行することのない一般の人々にとつては、この中庸の道を歩むことは困難です、と語っています。

この中庸は至人の成す所、如来の教えの五智（大円鏡智、平等性智、妙觀察智、成所作智、法界体性智）の一つ、成所作智のことです。天の成す所を成す智慧のことです。すなわち大自然のように、何の見返りを求めること無く、自我を滅して行う布施行のことで、魂の浄化のための智慧の一つです。莊子は、これこそ本根であると言っています（莊周菩薩品「莊子、成所作智を説く」を参照）。

次に続きます。

「子曰く、道の行われざるや、我これを知れり。知者はこれに過ぎ、愚者は及ばざるなり。道の明らかなるや、我これを知れり。賢者はこれに過ぎ、不肖なる者は及ばざるなり。人、飲食せざること莫きも、能く味を知ること鮮し。子曰く、道、其れ行われざるかな」

私訳してみますと、

先生は言いました。「この社会のなかで、中庸の道を歩んでいる者はほとんどいないことを私は知っています。知識人は知識を詰め込み過ぎて、人為を持って自然を制しようとするので中庸の道を歩むことができません。如来の教えを知らない愚痴なる者は、そのような道が存在することさえ知りません。また、

世の中の事柄に精通した賢者と言われる人たちは自分が歩んでいる道こそが正しい道だと考えていますから、名利のためにやらなくて良い事までやり過ぎてしまっています。社会の規範からはずれた生活をしている不肖な人たちは生活のことを考えるだけで、道などを考えている余裕ありません。人々は毎日、食べたり飲んだりすることを続けていますが、その味が内なる清浄心にどのような影響を及ぼすのか知っている人はほとんどいません」

この一節は孔子が中庸について語るといって設定になっています。荘子は莊子書の中でも仏教の教えを儒家を通して語らせていますから、孔子を通して仏教の教えを語らせたように思います。またこの一節は、「過ぎたるは及ばざるが如し」という諺となっています。頭に知識を詰め込み過ぎた者は、まだ頭が知識で埋められていない者に及ばない。頭が知識で埋められていない者は如来の説法を素直に受け入れることができるという教えです。また、食べ物味の話ですが、荘子は、五色、五音、五味、五臭が内なる清浄心を惑わすものであることを何度も繰り返して説明しています。この五味（あまい、からい、しょっぱい、すっぱい、からい）、すなわち味が濃いものを摂取することが心の平静さを妨げることがを説明しています。荘子は私たちに、味は淡泊にして、自然の素材の味を感じながら食することの大切さを教えてくれました（続・莊周菩薩品、莊子の般若心経、「六根清浄と五無漏」を参照）。

## 第二段、第二節（1）

「古代の皇帝、舜しゆんについて語られている一節です。

「子曰く、舜の其れ大知たいちなるや。舜は好んで問もんい、好んで邇言じげんを察し、悪を隠して、善を揚あぐる。其の兩端を執とつて、その中を民に用いる。其れ、これを以て舜となすや」

舜は中国の太古の皇帝で、皇帝堯ぎやうから禪讓ぜんじやうを受けて皇帝になり、賢人を用いて国を治めたと伝えられている人物です。邇言は、通俗的で誰にでも理解できる言葉のことです。

私訳してみますと、

先生が言いました。皇帝の舜は大知、すなわち賢人を傍に置き、たくさんの知識を用いて、故意に通俗的な言葉を用いて人々に語り、国を治めた皇帝でした。賢人に国の治め方を問い、天下の悪行を覆い隠し、善い行いをするを推し進めました。そして、物事を決めるときは賢者の意見を聞いて、政治が偏り過ぎないように心がけて、民を喜ばせるように心がけたのです。それが、かの誉れ高い皇帝、舜なのです。

ここで語られている大知は、一般的には最高の知とされているようですが、前文で世間の知識を詰め込んだ者は、知識を詰め込んでいない者に劣ると述べられていますから、それでは意味が通りません。たくさんさんの知識を活用した人という意味として解釈しました。荘子は偉大な皇帝として語り継がれている舜について、「皇帝堯や舜の時代になると、たくさんさんの知識を用いたために、ますます人為的な物が多くなり、それらは人々から大切な素朴さや素直さを徐々に奪ってしまいました。これらの君主は人為的な行いをもって人々を喜ばせ、それを善行としましたが、自然の摂理に順う菩薩道からは遠く離れ、徳の衰えを止めることは出来ませんでした。たくさんさんの賢人を要職に採用しましたので、人々は名利や物に執着するよ